

会報

〒183-8534
 東京都府中市朝日町3-11-1
 東京外国語大学ロシア語
 鈴木義一研究室気付
 東京外語ロシア会
 TEL 042-330-5268
 FAX 042-330-5429
 振替口座 00110-8-22338

群像社と私
 ソ連崩壊20年の節目に
 フェリスブックのモスクワ
 府中だより
 二〇一〇年度ロシア語専攻論
 『濠洲檢察官』を振り返って
 復刊ロシア会報の編集に関わって
 ロシア会会報報告

島田進矢 2
 遠藤良介 4
 太田丈太郎 5
 鈴木義一 6
 守山真利恵 7
 町田悦子 8
 前田和泉 9

私の中の外語



佐藤 純一

私が新制東京外国語大学の二期生として入学したのは一九五〇(昭和二十五)年四月のこと、大学は上石神井の私立中学の校舎と、そこから五分ほど歩いたところにある旧制東京美術学校(今の東京芸大)のバラック校舎と改造した学生寮を教室に使っていた。雨の日は教室の移動に苦労したことを覚えている。幸いその翌年からは西ヶ原の旧海軍火薬廠の跡地に新築された木造二階建ての新校舎に移ったが、これがひどい安普請の代物で、向かいの立派な建物の女子校の生徒たちの軽蔑気味の目が気になる感じだった。

一年生から二年生にかけては、連合軍占領下での大学教員のレッドパージや朝鮮戦争勃発に伴う再軍備の動きに反対する学生運動真つ盛り頃で、勉強どころでなかった記憶があるが、その後なんとか落ち着いて専門の勉強が出来るようになったのは優れた先生方や友人たちのお蔭だったと痛感している。私がロシア語の記述文法や標準語史、スラヴ諸語の比較対照研究などを専門とするきっかけになったのは同級生の千野栄一君との付き合いだった。彼の高校の先輩に当たる言語学の徳永康元先生の講義に誘われて、言語学、民族学の初歩を学ぶ中で、戦前ブダペストに留学された先生から東欧の言語と文化の多様性についていろいろ伺った。当時の日本ではまだ形を成しているロシア語研究の必要を初めて悟ることが出来た。

当時のロシア学科は佐藤勇先生の下に東郷正延、和久利哲一、石山正三の三先生とアレクサンドル・ミチューリン先生が専任という体制だった。東郷和久利、石山の諸先生の授業は戦後の新しい時代の発展の方向を示す意欲と情熱に溢れる内容で、ロシア語教育の基本の多くを学んだように思う。ミチューリン先生はトムスク帝国大学の出身で法律家であられたが、西欧の諸言語や古典語の知識も広く、千野君と私のお願いに快く応じられて大塚駅近くのご自宅で課外の古教会スラヴ語の講読の指導をして下さった。ご恩は忘れたい。

外語大に關わる嬉しい出来事として思い出すのは、二〇〇〇年十一月に、私が九代目の会長を務めていた日本ロシア文学会の創立五〇周年記念の一連の催しが、渡辺雅司さんの尽力で、移転後間もない府中の新校舎で行われたことで、第五代会長の東郷正延先生をお招きして米川哲夫(七代)、原卓也(八代)の歴代会長とともに学会の発展を祝うことが出来た。

ミチューリン先生は一九五六年に病没され、そのお墓は多磨霊園の外人墓地にある。二一十夫人やブゾフノ先生がソ連に引き揚げられた後は私がお預かりしていたが、外語大がすぐ近くに移ったことや自分の将来を考えると、原さんと渡辺さんにご相談してロシア会の管理に任せて頂いて心から感謝している。

最後にもう一つ打ち明けると、私にとって石山先生は旧制中学(都立五中)の先輩であり、渡辺さんはその後身の小石川高校の後輩ということで、重ね重ねの外語ロシア会とこの縁は不思議と言うほかはない。

(昭29 東京大学名誉教授)

群像社と私

島田 進矢

ほぼ三十年前、まだ東京北区の西ヶ原にあった東京外国語大学のサークル棟と呼ばれた四階建ての建物にソ連東欧研究会の部屋があつて、当時ロシア科のたしか二年生だった私はちよつと不純な動機でそこに出入りをはじめた。ソ連東欧研究会(SERGセルグ)は一学年上の外池氏が中心になつてつくつたサークルで、いくつかの勉強会を定期的に開きながら、そのころソ連の反体制派物理学者として国内流刑になつていたサハロフ博士の救援活動に力を入れていた。つまり当時の政治的な色分けでいえば「反ソ」のサークルではあつたものの、外池氏は本屋で見つけたソ連関連本は親ソ反ソ関係なく買ひ集めてサークル員のために本棚をつくるという方針をもつていて、そのおかげで親ソ派と見られていた群像社が発行している『ソヴェート文学』も何冊か棚にならんでいた。それが私と群像社の最初の出会ひだった。

その頃の群像社は、まだできて二、三年目の若い出版社で、モスクワのプログレス出版で翻訳者として働い

ていた宮澤俊一氏と浅川彰三氏が日本に帰つてきて、当時のソ連の現代文学を日本に紹介するためにつくつた会社だった。最初は「現代ロシア文学」を出してくれる出版社を探して企画書をもつてまわつたものの、当時はどこの出版社もソ連に関しては反体制派か亡命派にしか関心をもつてくれず、それならばと自分たちで出版社を立ち上げた二人は、出身の早稲田大学の師であつた黒田辰男氏が代表をつとめていたソヴェート文学研究会が出している『ソヴェート文学』の発行も引き受けた。この雑誌はソ連の作家同盟がいわば「官許」文学を外国に紹介するために各国外で出していたものの日本語版であつたために、群像社に「親ソ派」というレッテルが貼られることになつたのは仕方ないことだろう。ただ、後に宮澤氏が書いているところによると(日本経済新聞、一九八七年七月十四日)、「たまに目を通す機会があつても、つまらない作品が載っている」と感じて途中で投げ出してしまふ「ほとんど関心をもてないでいた」雑誌で、黒田氏に頼まれて「ずいぶん迷つたが、頑張れば自分たち

の好きな作家の作品を載せていられる場に行けるかもしれないと思ひ」引き受けたという。ソ連共産党書記長ブレジネフの「回想」を掲載せざるを得なかつたときの苦汁もこの記事からよく伝わってくる。外から見ると内実は一枚岩ではなかつたらしい。

もちろん、そんな経緯はすべて後から知つた話で、学生だった私にはもちろん単純な色眼鏡しかなく、正直、あまりセンスのよくない装丁の雑誌という印象で、掲載されていたなかで記憶に残つた作家の名前はワレンチン・ラスプーチンひとりだった。ちょうどその頃、ロシア科の主任教授でサハロフ人権擁護キャンペーンにも熱心だつた原卓也先生が岡治子氏と共訳でラスプーチンの『生きよ、そして記憶せよ』を出したばかりで、あまり勉強熱心な学生ではなかつた私の耳にもその名は注ぎ入られていたからだつた。しかし、

その『ソヴェート文学』も、群像社も、大学を卒業してしばらくロシア文学とは無縁の世界で働いていた私の関心領域からは完全に消えていた。

数年後、ただ出版の仕事の経験ありという履歴書の一行を得るためという、またしても不純な動機で私は『新日本文学』という雑誌の編集部にもぐりこんでいた。雑誌を発行す

る新日本文学会はマヤコフスキー学院という、原卓也氏や江川卓氏をはじめ名だたるロシア文学者を講師にもつ私塾を運営していて、そこに当時、群像社の営業係をしていた大谷氏が通つてきていた。私がそろそろ新日本文学会を辞めるつもりになつていることを知つた大谷氏から、ある日、群像社に勤める気はないかという誘ひを受けて、私ははじめて宮澤氏に会つた。雑誌よりも単行本を作りたいという思いに傾いていた私は、ロシア語ができて編集もできる人を探しているという宮澤氏の言葉のまま、二つ返事で群像社に入ってもらふことにした。ゴルバチョフの登場でソ連が大きく変わりつつあつた一九八八年のこと、群像社はペレストロイカの文学を代表する作家アイトマトフの『処刑台』を刊行した直後で、宮澤氏はこれからどんだん本を出したいと意気軒昂だつた。

その翌年、群像社からも一冊、『藝術の青春』という本を出していた詩人のヴォズネセンスキイが来日して東京外国語大学で講演会が開かれたとき、群像社の社員として宮澤さんと一緒に会場に行つていた私は、そこで久しぶりに原さんにお会いした。かつての単純な色分けで言えば反ソ派と親ソ派であつた原さんと宮澤さんの間にはさまれるかっこうで立つ

私に、原さんは、あのちよつと皮肉な笑みを浮かべながら「また妙なところにもぐりこんだな」と声をかけてくれた。群像社で少しづつ本作りの経験をつんでいった私に、原さんはその後もたまに、群像社から「抜け出せるような」仕事の口を紹介してくれようとして電話をくださった。もう群像社に腰を落ち着ける気になつていた私だったが、そんな電話があることを宮澤氏に言うことはできなかった。

一番あとから群像社の一員となつた私は、群像社を去っていく浅川氏や大谷氏を見送ることになり、ついには宮澤さんと二人になった会社の事務所で、ふだんは一人で働く日々がしばらく続いた。その宮澤さんが二〇〇〇年の二月に亡くなつて、私は悩んだ末に群像社をひとりで継続することに決めた。とはいえ、宮澤氏のように自己資金をつぎ込んで経営を維持するなどということは到底かなわない。一人で支えきれないのなら、支えてくれる人を募ってみようかと考えて、〈群像社 友の会〉という名の読者の会をつくることにした。出版社の財産は本であり読者であるといつても、本を買ってもらっただけでなく、それ以上の支えを讀者に求めるのは異例かもしれない。けれど、群像社のように極小規模でロシア文学という限られたジャンルだ

けの出版社を維持していくためには、そこにかけてみるしかないという思いだった。宮澤氏は生前、苦しい群像社の経営状態をみながら、ロシア文学をやっている人たちがもう少し群像社を支えてくれたらなあ、最近のロシア文学研究者にはロシアに対する愛が感じられないなあ、と嘆いていた。(群像社 友の会) は、いわゆるロシア文学関係者にかぎらず、群像社の本を一冊でも読んでくれたことのある人、それまで無料でPR紙を送ることでつながりを保つていた読者に広く呼びかけることにした。いったいどれくらいの人が入会してくれるものか、まったく見当がつかないまま、そして支援会員として最初の会費を振り込んでくれたのが、原卓也氏だった。

私が群像社を引き継いで、十一年がすぎた。経営状態が変わらなければ、よくもつて三年という状態からはじまつたけれど、ありがたいことに〈群像社 友の会〉は精神的に大きな支えになってくれている。会員数は一進一退。いまや「反ソ」も「親ソ」もすっかり過去のものになり、政治的なバイアスがなくなつて群像社をめぐる環境はよくなっているはずなのに、読者はなかなか増えない。私からすれば父親世代の、ほぼ同年齢で微妙に違う角度でロシアと付き合い続けてきた原さんと宮澤さんは、

もうこの世にいない。宮澤さんと同じ嘆きをときどき口にしてみたくなるときもあるけれど、原さんの入会申し込みの振替用紙を手にしたときの感動がいつかまた訪れるかもしれないからと、私はいまも群像社を続けている。(昭59)

群像社 友の会 入会のお願ひ

〈群像社 友の会〉は群像社を支える読者の会で、群像社がロシアの文化を本のかたちにして日本の読者に手渡すことができるのは、〈友の会〉のみなさまが常に群像社に関心を寄せてくださるおかげです。ぜひ会員のご入会をお願い申し上げます。

入会金は不要です。年会費には郵便振替をご利用ください。

(加入者名・群像社

口座番号・00150・4・54777)

* 年会費三千元の支援会員の方には、ロシア文化通信「群」(年2回、七・十二月)、「群像社通信」(隔月刊)をお送りし、年末に特製カレンダーを進呈します。また発売後6か月以内の新刊の直接注文はすべて送料無料いたします。

* 年会費五百円の普通会員の方には、ロシア文化通信「群」を年2回(七・十二月)お送りします。



宮澤俊一氏の遺稿集
『ロシアを友に』

ソ連崩壊20年の節目に

遠藤 良介

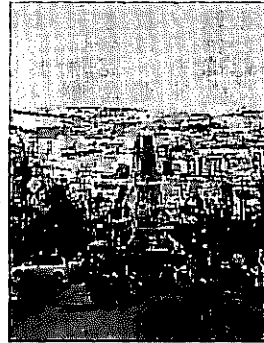
今年には20世紀最大の歴史的事件の一つ、ソ連崩壊からちょうど20年の節目の年に当たる。私の所属する新聞社では年始から「ソ連崩壊20年 解けない呪縛」という通年企画を連載しており、旧ソ連各地を訪れて「20年後の今」を見る機会に恵まれた。

その中で抱いた感想を大雑把に記すならば、「この20年間のロシアの変化は決して小さくないものの、帝政、ソ連時代を通じて形成されたロシア人のメンタリティーはやはり強固だ」といったところになる。

印象に残っている地の一つに、ロシアの東の最果て、マガダンがある。スターリン時代には国内最大のラーゲリ(強制収容所)集積地であり、政治弾圧の犠牲者や囚人が金鉱山の開発に当たったことで知られる。スターリンの没後は僻地の割り増し手当てで技術者や労働者を確保したものの、ソ連の解体で人工的な版図維持策は立ち行かなくなり、激しい人口流出に見舞われた。

今もマガダンでは十分な飲食店やホテルを探すのに苦労するほどで、経済の疲弊は明らかだ。せつかくの有望な

金鉱山も国が資金投下してくれねば開発できないという状況で、地方が自らの創意で地域振興に取り組む姿勢は見えなかった。



極東マガダンの街並み

何よりも驚かされたのは、私が話を聞いたスターリン弾圧の経験者6人のうち4人までもが「スターリンを評価する」と答えたことだった。曰く、「圧政だったかもしれないが、それはロシアの伝統だ」「当時は秩序と安定があり、今のようになかった」と。

メドベージェフ現大統領が1期限りで退任し、プーチン首相(前大統領)が来春、大統領に復職するという最近のニュースも、こうした民衆心理を踏まえないと理解できないように筆者は感している。

プーチンとメドベージェフが次期政権で役職を「たすぎがけ」にし、プーチンは最長で二〇二四年まで大統領に居座る。民主主義国なら「民意無視の密室談合」と猛批判を浴びるべきところだが、ロシアではこのことを鋭く批判したメディアが皆無に近かった。

ある識者はこうした状況について、「ロシア人の軍隊的メンタリティー」という表現で解説する。趣旨は次のようなものだ。

〔モンゴル帝国による侵攻に始まり、大祖国戦争に至るまで、ロシア人には絶え間ない戦争を通じて築かれたメンタリティーがある。それは生き抜くための価値観であり、人々は軍隊式の秩序(独裁と服従、規律、あるいはプーチンが築いたようなトップダウンの権力構造をむしろ望んでいる。有能な人物が長期的に指導者の地位にあることは当然であり、逆にエリツィンのように自らの権力を生かせない指導者は受け入れられない〕

実際、ウラル地方の小都市、ベレズニキにあるエリツィンの母校プーシキン第1学校には、プーシキンでもエリツィンでもなく、レーニンの胸像が立っている。校史を紹介するミニ博物館の一室で、エリツィンに関する展示は数点の書籍と新聞記事だけと寂しい限りだった。



エリツィンの母校

プーチンは一九九〇年代の急進改革で打ちひしがれ、安定と秩序を望む民衆心理を理解しているからこそ、満を持して大統領に返り咲く。さらに、同様の「軍隊的メンタリティー」を持つ周辺諸国を糾合して「ユーラシア連合」を結成するともぶち上げているわけだ。

ただ、プーチンの大統領復帰がロシアの発展に良いのかは全く別問題だ。地下資源頼みの後進的経済や深刻な汚職といった社会問題から脱却せねば、ロシアが先進諸国にも中国にも引き離される一方なのは目に見えている。プーチン自身が前大統領期に骨抜きにした議会や司法、報道といった民主主義の仕組みが、本当は求められているのではないか。

知識人や独立心に富んだ事業家といった層にはすでに、プーチン時代長期化への反発や倦怠感が広がっている。彼らはソ連・ブレジネフ期を指す「停滞の時代」に現在をなぞらえ、今や「安定」「停滞」に転化したとみているのだ。

まさにブレジネフ時代に改革を怠ったことがソ連崩壊という大ショックを招いたともいえるわけで、今後は「安定」「停滞」の底流にあるロシア社会の動向を注意深く追っていかねばならないと思っている。

(平9 産経新聞社モスクワ支局)

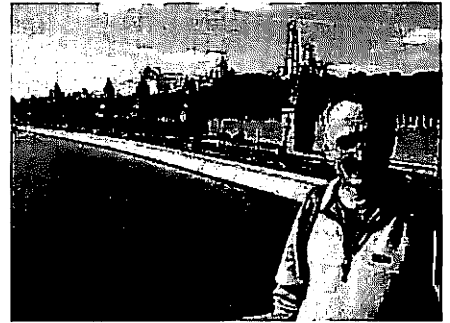
フェイスブックのモスクワ

太田 丈太郎

二年ぶりにモスクワを訪れた。今回のモスクワ訪問の目的は二つあった。一つはロシア連邦国立公文書館とロシア科学アカデミー文書館で資料を閲覧・コピーするため、もう一つはアレクサンドル・ブローク没後九十年記念国際会議に出席するためだった。

いつもながら、ロシア滞在は予定通りにはいかない。毎日がサブライズだらけだ。だったら初めから自分もサブライズに加担してみようというわけで、MacBook Proを携えフェイスブックにログインしつつ、リアルタイムでフレンドたちとコンタクトを取り合いながら、「いま・ここ」を自分で演出してみることにした。

結果は実にめざましかった。朝といえ晩といえ、ウォールの賑やかなことといったらあちこちから是非会いたいという申し出や励ましの言葉をもらい、今日のソーシャルネットワークの威力を思い知らされることになった。サンクト・ペテルブルクには私の第二の母といふべきヒトがおり、友人や知り合いも多いのだが、それに比べてモスクワは私にとって未知にひとしい。知り合いがいても同業者に限られる。それがフェイスブックのおかげでこれまで接点のなかったヒトたちとリアルで知り合う機会が得られ、私のモスクワ交遊の環が格段に拡がった。



フェイスブックで知り合った写真家アラン

なかでも、アラン・ランヌーという写真家と知り合えたことがなによりの喜びだ。彼とはこの春からフェイスブックを通じてやりとりをしていたが、実際に会ったことはなかった。ヒマラヤやチベット、アルタイの山々を歩き

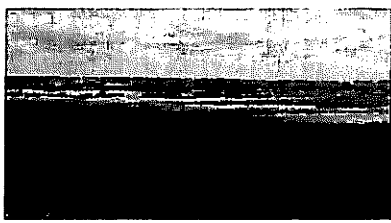
つづけ、写真を撮り、それを絵画に仕上げていく。彼のカメラが切り取った視座から観ると、まるで自分もその場に居合わせているかのようだ。「むかし僕のアトリエがこのあたりにあってね。だから落ち着くんた。赤の広場から橋を渡り、アランとノヴォクズネットツカヤ駅付近のカフェでウオトカの杯を交わす。現在はセールギエフ・ポサードで暮らしているという。こんどはカイルス山まで撮影に行きたいんだ、近くまで行ったんだが。彼の話に聴き入っている。モスクワの喧嘩が風のざわめきのように聞こえてくる。はるか東の、ステップの彼方から吹いてくる

風。「秋の初めの晴れ渡った夕暮れなんぞに素晴らしい夕焼けが僕のいるモスクワ郊外では見られるのだけれど、あれはね、とおい中央アジアやモンゴルのほうから吹いてきた風がロシア平原で北へ向きを変え、ステップのホコリを巻き上げ、それでああいう空の色になるんだ。ユーラシア主義、トルベツコイ、などという学術用語が瞬間頭をよぎるが、この際ウオトカに書物などには無力だ。なにしろアランのコトバには、実際に大陸を見て歩いてきた者ならではの説得力と生々しきがある。アンドレイ・ペールイに『カフカースからの風 Berep c Kavkazaj』という本があるが、アランから『東からの風 Berep c Boctvaj』というとても豪華なアルバムをいただいた。「東からの風は西へ至り、いまや東の故郷へ戻らんとする。アランより」。

ロシアの大地。とはいえ私はそれを目の当たりにしたことはない。私が知っているのはほんのわずか、サンクト・ペテルブルクとモスクワという海のなかでも二三の島のようなものにはすぎない。なるほどブロークやペールイについて論文を書いたこともある。「スチヒーヤ」というロシア語に、大地とナロードの胎動に思いを馳せたこともあった。しかしながら、それはすべて書物にすぎない。身体全体で体得したものではない(そもそも同時代でない後世の、それも外国人に体得できるはずもない)。「菌状の森 of mushroom forest」の向こうに「おまえ」が「空焼け

「おまえ」の光輝につつまれ待っている。私はおまえの変貌の瞬間を待ちながら恐れるという。

いうまでもなく、これはブロークの作品からの引用だ。ブローク没後九十年記念会議のエクスカージョンで、彼がリュボフ・フィ・メンデレーエフ(元素周期律で有名な化学者メンデレーエフの娘)と結婚式を挙げたタラカノヴォ、幼少時から暮らした領地シャーフマトヴォ、メンデレーエフ家の領地ポロヴォを訪れた。コトバは受肉する必要がある。とはいえ書物のコトバには実体がともないにくい。大袈裟かも知れないが、そんな書物や概念のコトバが実体化する、実現する瞬間を体感したい。そう長く願ってきたが、実際にそれを目の当たりにすると、もうコトバはいらなかつた。吹きつける風は強く、雲の影が大地を渡っていった。



ポーロヴォ近郊の風景

自分の生きていく地平線にそれが瞬間触れたかのようだった。
(平元 熊本学園大学商学部教授)

府中便り

鈴木義一

昨年のこの欄では、国立大学の予算削減に連れ、国立大学が質の高い研究・教育を維持するためには、大胆な発想での行動が求められる」とした上で、東京外国語大学の取り組みについては一年後にお伝えするとした。その時はまだ学内での検討段階にあった新学部の設置が文部科学省の承認を得ることになり、やっとここでも紹介できるようになった。

しかしこの学部改革の説明に先立ち、いつものように過去一年のイベントの紹介から始めたい。

まず、恒例の中野健三基金シンポジウムは、昨年二月七日に「ロシアのビジネス最前線」というテーマで開催された。パネリストはいずれも本学のロシア語学科を卒業したビジネス・パーソンで、ロシアNIS貿易会モスクワ事務所長の池田正弘氏(昭和51年卒)、コマツ物流株式会社(昭和52年卒)、コマツ物産株式(昭和52年卒)、ピエー・ジェイ・エル株式会社(昭和52年卒)の三名であった。池田正弘氏からは、近年ロシアに進出した日系企業について詳しい紹介があり、鈴木茂氏からはコマツのロシアおよびその他のCIS諸国での事業展開について詳細なデータと

もに説明があった。山田紀子氏はロシア専門の商社の代表取締役であるが、そこでは日本の医療機関で検査・治療をする患者をロシアから受け入れる業務も行っており、メディカル・ツーリズムという新しい分野についての紹介があった。デイスカツションの中では、ロシアで活躍する企業に将来就職することを希望している学生から、積極的な質問が出された。なお、このシンポジウムの実施に際しては、東京外語会モスクワ支部、東京外語ロシア会、東京外語会平成の会からご協力を頂いた。

今年一月二日には、亀山学長が研究代表者となっている科学研究費のプロジェクトによる国際シンポジウム「自由への試練 ポスト・スターリン時代の《抵抗》と《想像力》」が開催された。海外からマイケル・ニコルソン氏(オックスフォード大学)とリュドミラ・サラスキナ氏(ロシア国立芸術学研究所)の二名を招き、ニコルソン氏は《雪解け時代》のしかめ面、ソルジェニーツィンとシャラーモフ、サラスキナ氏は《雪解け時代》の文学、その勝利と挫折(パステルナーク、ソルジェニーツィン、フルシチョフの「コンサート」)と題した講演を行った。さらに貝澤哉氏(早稲田大学)が「液化化するスクリーン 雪解け以後のソ連《ヌーベルバーグ》映画」、亀山都夫氏が「シヨスタコーヴィチの贖罪」とい

うテーマで報告を行った。東京大学本郷キャンパスの山上会館において公開のシンポジウムとして開催され、会場は満席となる盛況であった。

さて、外国語学部の改編についてだが、すでに日本経済新聞などに広告が掲載され、大学のホームページでも詳しい情報が公表されているので、ここでは改革のポイントを指摘する。まず、来年度(二〇一二年度)から外国語学部は言語や文学を中心とした「言語文化学部」と社会科学の分野を中心とした「国際社会学部」の二つの学部で改組される。それにともない、従来の専攻語と副専攻語の言語科目、地域基礎科目、およびその他の教養科目は「世界教養プログラム」という二学部共通の教育プログラムに再編される。今回の改編のもう一つの柱は、「地域」の枠組みを重視することにある。とくに国際社会学部では、入学時に従来の専攻語別の区分ではなく一四の「地域」のいずれかを選択し、その地域に対応した「地域言語」を学ぶことになる。また、この改編に伴って「中央アジア」、「アフリカ」、「オセアニア」の地域と、言語では「ベンガル語」が新設となる。

何もしないでいると政府からの予算配分が毎年カットされ続けるといふ状況の中で、むしろ積極的に打って出ることによって研究・教育の

基盤を確保することが、改編のモチーフの一つである。しかしながら、東日本大震災によって東北三県の国公立大学が甚大な被害を受け、震災復興のために政府予算のかかなりの部分を充当するというところから、新学部設置の認可を得るのは苦難の連続であった。また、組織の改編の際には様々な思惑が錯綜するため、学内での意見の取りまとめも決して容易ではなかった。幸い、受験生の評判は上々のようで、新学部発足に向けた最後の詰め作業が進んでいる。

来年(二〇一二年)以降ロシア語専攻の教員の構成も変わってくる。ロシア語科にとっても今後の一二年は大きな転換点となるだろう。(教授・ロシア経済史)



二〇一〇年度ロシア語専攻語劇 「濊流検察官」を振り返って

演出 守山 真利恵

「語劇」とは一体なんだろうか。学生が、各々の学習成果を披露する場なのか。それならわざわざ劇をやらなくてもいいはずだ。なぜ、覚えたての言語を使って、舞台上立つのか。昨年度は、語劇が持つ意味に注目して作品に取り組んだ。

戯曲はロシア古典演劇の中でも傑作といわれるニコライ・ゴゴリの「検察官」だ。この作品に決めたのは、「ゆとり世代」と称される我々にも「読める」と感じたからである。恥ずかしい話だが、正直、私は古典作品を読んでもその作品の真意を読み取ることができない。描写や言葉の美しさ、巧みさ、面白さはわかるが、それ以上の読解ができないのである。しかしそれは、国も時代も違う作家が書いた作品であるから、ある程度はしょうがない気もするが、あれでもない、これでもない、と悩んでも結局納得がいくような結論は出ないのだ。そんな私たちが果たしてロシア古典を題材に劇などできるのか？そんな不安を抱えていたところ、「検察官」に出会った。今でも色褪せない巧みなテキスト、天才的な構成、そして何より、もう少し深く読めるの

ではないか、という可能性を感じたのである。

ちなみに、タイトルの「濊流」は、宮本武蔵と佐々木小次郎の「濊流島の決闘」のことである。学生が自由に作ることでできる語劇ならではの「チャンバラがやりたい！」という意見が多数出たのでそれを「検察官」の中に織り交せてみた。(割と無理やりだったが、自分たちでかき集めた資料の中から「検察官」と合体できそうなものを選びオリジナルという形で脚本を書くことになった。「検察官」がカーニバル理論に立脚した戯曲であることは皆認識していたので、諸説ある「濊流島の決闘」の中からどんでん返しの落ちが付いたものを採用した。全く別の物語にもかかわらず案外うまく合体し、脚本はなかなかドラマチックに仕上がった。

せっかく劇をやるならただしやべるだけではなく、私たち自身のことも言葉に乗せて表現したい。戯曲の力を借りて、私たち自身をお客様に観ていただきたい。美しいロシア語をしやべることが当たり前前のタスクだが、当日観にいらつしやるのはロシア語にあまり触れたことのない方のほうが圧倒的に多いはずだ。ならば、流暢にロシア語をしやべっているだけでは駄目なのである。せっかく来ていただいたのだから、しっかり楽しんでいただきたいのである。



そんなことを全員で考えながら稽古を進めていたら、いつの間にかゴゴリの戯曲が役者の身体に吸収され、テキストの表層を越え、「私たちの」解釈を体現するようになっていた。時代を問わず全てに人に愛されるゴゴリの戯曲は、私たちにも等しく馴染みやすいものだったため、解釈は割とスムーズに進んだ。役者それぞれが思い通りにセリフを口にし、従来の解釈とはだいぶ違うかもしれないが、私たちができる読解を、表現を、稽古場でぶつけ合うようになっていった。何より素晴らしいかったのは、役者だけでなく、スタッフもそれぞれの見解を持ち、役者に飲まれることなく稽古に参加してくれたことだ。文字通り、全員が一丸となつて新しい「検察官」を生み出すうとしていた。稽古場は毎回、新たな発見と衝突にあふれ、とても刺激的だ

だった。ロシア語が、表現の手段として機能し、日本人同士なのにロシア語をコミュニケーションの足掛かりにしてお互いがどんどん仲良くなつていった。

私たちは授業でロシア語を学ぶが、授業を離れるとそれを生かして各々で考えたことを相手に伝えるように表現するという機会はなかなか無い。その意味で、昨年度語劇は真に貴重な体験であつたと言えるだろう。勿論、従来の概念を越えた解釈や演出は賛否両論だったが、それでも例年にならぬパワーと衝撃を届けることが出来たと自負できるのは、やはり一人一人が作品に対して、自分の考え、主張を盛り込み、それを臆すること無く「ロシア語で」表現できたからではないだろうか。「演劇」という生の表現だからこそ、より強烈に、より鮮やかに、お客様に伝えることが出来たと思う。

2010年度ロシア語専攻語劇 「濊流検察官」

代表：平瀬亮
舞台監督：井上裕貴
会計：白部直也
演出：守山真利恵
出演：久保雅法、本堂俊輔
ほか21名

復刊ロシア会報の編集に関わって

町田 裕子



一九九七年十月二二日に16年ぶりにロシア会が開かれ、総会では空白の期間に実施された大学の語学科制から課程制への変革に合わせた会則の変更と会長以下役員の出承承認が行われ、懇親会は東郷正延先生卒寿の祝賀会となりました。再興ロシア会の第一回開催でした。そのいきさつは会報復刊第1号の原卓也先生の巻頭言、今西昌幸さん(昭34)の「再生ロシア会総会について」に詳しく書かれています。

以来、ロシア会は毎年開催され、ロシア会報も一九九八年の復刊第1号から、昨二〇一〇年の第13号まで毎年発行されてきました。私も会報編集にこの13年間関わってきたこととなります。編集に関わったの苦労話でも、ということだったと思うのですが、振り返ってみると、本当の苦労をしたことはなかったように思います。

私がした苦労といえば、お願いした分量をはるかに越えた原稿を、何とか読みやすい体裁に整えたり、工夫をしてもどうしても半ページなり1ページの空白が出来てしまった時の始末でした。関連のある小さな記事を書いて入れたり、これだけスペースがありますが、何か載せるお知らせでもありませんか?と先生方に向かがい、丁度すっぽり空白スペースを埋める講演会のお知らせを頂いて嬉しかったこともあります。ワードで編集、レイアウトをして入稿したときにはホッとしました。

よい会報を作るには企画がとても大事だとつくづく思いました。

渡辺雅司先生を中心に、ロシア会の各担当幹事(大学の先生と卒業生数人、ときに大学院生、学生幹事も)が集まり、会報の内容についてあれこれ話し合い、決めていきます。このとき大事なものは、このことなら誰に頼むのがいいか、よく知っている人がいることです。同窓会報の場合には現役の先生、長く母校で学生を教えてこられた先生が関わっていてくださることです。その点、広く同窓生をご存知の渡辺先生がいらつしやり、お若い先生方、鈴木義一先生、沼野恭子先生、前田和泉先生も加わられましたので、実に心強いことです。

今、改めて会報を読み返してみると、わずか13年の間のことですが、それぞれの時代背景が思い出されまます。ソ連邦解体後のロシア、ロシア人の状況についての文章が2号に書かれています。ロシア経済の混乱期には毎年20人以上の学生がロシアに留学していたそうで、日口青年交流の報告や、世情おさまらぬ時期だったために少々ごころじやない?ひどい目に遭った留学記、暖かく迎えられた留学記などの記事もあります。二〇〇〇年にプーチンが大統領になると、モスクワ、キエフを訪れ観察した、プーチン政権下のロシアについての考察を書かれた文章が3号と4号に、その後復調したロシア経済事情とプーチン政権について5号に、ロシア経済と日口経済協力について6号に、プーチン大統領とユラシア主義について8号に、最近のロシア事情について10号に、いずれも元新聞社特派員、商社マン、研究者として活躍された、あるいは活躍中の方々の筆になるものです。

最近では、現役世代の同窓生から読み物としても面白く興味深い原稿を寄せられることが少しずつ増え、嬉しいことです。ページを増やしても載せなければと思います。

この13年の間に、和久利哲一先生

東郷正延先生、千野榮一先生、飯田規和先生、原卓也先生、新田實先生が他界されました。友人、お弟子の方々の心のこもった追悼の文章が会報に収められております。

毎号出来るまでには寄稿者はじめ、多くの方々の協力があつたればこそと、感謝いたします。大学院生の方にも名簿、連絡その他の細々した事で手伝わってもらった事があります。記して感謝します。

最後にこれをお願いです。発送が終わって数週間経った頃、宛名人不明で戻ってくるのが多く、このときばかりはがっかりします。何とか名簿をより精度の高いものにしたいです。

住所変更等の連絡等は左記にお願いいたします。

〒一八三―八五八四

東京都府中市朝日町三―一―一

東京外国語大学外国語学部

ロシア語専攻 鈴木義一研究室 気付

東京外語ロシア会

【電話】〇四二―三三〇―五二六八

【FAX】〇四二―三三〇―五四二九

【メール】roshikai@ufs.ac.jp

これまでのご協力に感謝して。

(昭34)

会計から

ロシア会の会費は、大学全体の同窓会組織である外語会の会費とは別立てになっており、金額は以下のいずれかをお選びいただけます(※会報送付の封筒の宛名頭部に赤字で〇印のある方は終身会費納入済みのため、払込票は同封してありません。払込票が同封されている方は、会費の納入をお願いいたします)。

・終身会費 三万円
(ゆうちょ銀行から振込む場合、手数料は窓口三三〇円、ATM二九〇円) または
・年会費 二千元
(同、窓口二二〇円、ATM八〇円)

東京外語ロシア会 2010 年度収支

(2010年4月1日～2011年3月31日 単位 円、監査実施済)

1. 収入

終身会費 (9名 単価 3万円)	270,000
年会費 (37名 単価 2千元)	72,000
寄付金	6,410
郵便貯金利息	401
合計	348,811

*注: 年会費には1千円の納入2件あり

2. 支出

会報作成費 (印刷製本作業代)	214,620
会報郵送費	164,217
郵便費 (総会・懇親会返信料)	10,335
会報宛名ラベル (支払先: 外語会)	17,200
霊園管理料 (ミチューリン先生お墓)	3,600
会議室利用料 (6月30日幹事打合せ)	3,000
語劇支援金	50,000
払込手数料 (2件)	630
ロシア会懇親会への補助	26,000
中野健三基金シンポジウム懇親会への補助	10,500
合計	500,102

3. 差し引き計算および繰越金

差引不足金	▲ 151,291
前期繰越金	2,235,050
次期繰越金	2,083,759

ロシア会懇親会収支

(2010年11月20日実施 単位 円)

1. 収入	出席者会費(卒業生52名 単価7千元)	364,000
	本会計からの補助	26,000
	合計	390,000
2. 支出	料理代	390,000
	合計	390,000

お手持ちのゆうちょ銀行総合口座からATMを利用して振込む場合、平成二四年九月三十日までは手数料が無料となります。詳しくはゆうちょ銀行のホームページをご覧ください。また、ゆうちょ銀行各店舗にお問い合わせください。

本年度で開催されたシンポジウム「ロシア・ビジネス最前線」の講演者三名分の懇親会費です。学生たちにとっては、ロシア・ビジネスの最前線で活躍される先輩方の話を聞く貴重な機会となりました。ロシア会としても有意義な企画であり、会長及び幹事会の同意のもとに支出が決定されました。皆様方のご理解を賜りたく存じます。

◆二〇一〇年度 終身会費納入者
今年度に三万円一括納入された方、及び分納額の累計が三万円に達した方のお名前は以下の通りです(送金到着順、敬称略)。
高橋友里、田中茂雄、岡崎忠昭、島田(土谷) 志保、関建二郎、松原育、沼野恭子、亀山郁夫、芦川浩
計九名
ロシア会会計 前田和泉

二〇一一年度 ロシア会総会・懇親会のお知らせ

今年度のロシア会総会・懇親会を左記により開催します。
年に一度のロシア科全同窓生の集まりです。
各年度、各クラスでお誘い合わせの上、是非、ご出席下さい。

日時 二〇一二年一月二十一日(土)

午後一時から 総会

午後三時半から 懇親会

総会会場 府中キャンパス研究講義棟一〇二教室

講演

「現地で見るロシア経済と今後の日露ビジネス関係」

元モスクワ、サンクト・ペテルブルク 日本センター長

朝妻幸雄氏

懇親会 午後三時半から 大学会館一階食堂で

会費 三千円(卒業生) 千円(在学生)

同封の返信用はがきを二〇一二年一月十三日必着でご投函を。

ロシア語専攻専任スタッフの紹介

二〇一二年一月現在のロシア語専攻の専任スタッフとその専門分野をご紹介します。

高橋清治教授・専攻代表

ロシア史

(ロシア・グルジアの民族問題)

中澤英彦教授

ロシア語学・ウクライナ語学

鈴木義一教授

ロシア経済

(現代ロシア経済・比較経済史)

沼野恭子教授

ロシア文学・ロシア文化

(現代ロシア文学・食文化)

匹田剛准教授

ロシア語学(ロシア語文法)

前田和泉准教授

ロシア文学・ロシア文化

(二〇世紀ロシア詩)

イリーナ・ダフコワ客員准教授

ロシア語教育法

なお中澤先生はこの三月をもって
定年退官されます。

この他に非常勤講師として秋山真一、
東井ナジエ、ジュダ、エレオノール・サ
ブリナ、浜野アキラ、ソイヤ・エフィ
モワ、エカテリーナ・グートワ、エカテ
リーナ・コムコワ、原タリヤ、アンナ・
プカーエワ、加藤栄一、古賀義顕、広岡
直子、古川哲、丸山由紀子、八島雅彦、
吉岡ゆきの諸先生がそれぞれの専門で
教えておられます。

東京外国語大学

アクセス方法

東京都府中市朝日町3-11-1

主なアクセス方法は2つ

JRR中央線「武蔵境」駅のりかえ
西武多摩川線「多磨」駅下車
徒歩5分

京王電鉄「飛田給」駅北口より
京王バス多磨駅行き

「東京外国語大学前」下車

編集後記

会報14号をお届けします。
興味深い内容の文章をお寄せ下さ
ったみなさま、本号の制作にご協力
下さった方々に感謝いたします。

一九九八年の復刊第一号から長
きに渡って会報の制作をとりまとめ
てくださった町田裕子さんの文章
は会報への思いが詰まっています。
今号も町田さんのご協力なくしては
発行できなかったであろうことを記
させていただきます。

最後になりましたが東日本大震
災により被災されたみなさまに、
謹んでお見舞い申し上げます。

(平16 山田智子)